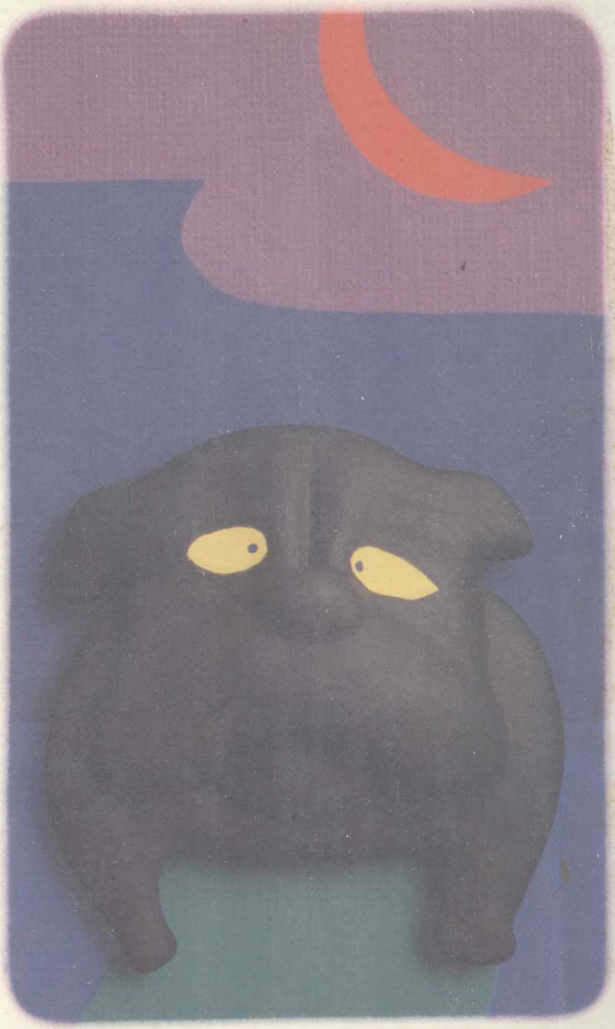
犬ミステリ傑作集

ブロードウェイの探偵犬

小鷹信光編



CANINE

ブロードウェイの探偵犬

犬ミステリ傑作集

小鷹信光編

大和書房

ブロードウェイの探偵犬
犬ミステリ傑作集

1984年12月15日　第1刷発行

編　者　小鷹信光
発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都文京区関口　1-33-4
〒112　TEL (203) 4511
振替　東京 6-64227
印刷所　高長印刷・東光印刷　製本所　誠幸堂

装画　林　恭三　装幀　高麗隆彦

乱丁本・落丁本はおとりかえします　ISBN4-479-51017-6
© N. Kodaka 1984　Printed in Japan

ブロードウェイの探偵犬

・たちどまった犬 *The Curious Incident of the Dog*	盲導犬	・ラルフ・N・ウェバー *Ralph Norman Weber*	・5
・犬と頭は使いよう *Lester Uses His Head*	雑種	・アーサー・ポージス *Arthur Porges*	・10
・百万に一つの偶然 *Kill Me, Kill My Dog*	マスチフ	・ロイ・ヴィカーズ *Roy Vickers*	・26
・チワワ誘拐事件始末記 *Canine Plus Three*	チワワ	・ローレンス・ワッサー *Lawrence Wasser*	・55
・愛犬の死 *Death of the Kerry Blue*	ケリー・ブルー・テリア	・ヘンリー・スレッサー *Henry Slesar*	・71
・犬のお告げ *The Oracle of the Dog*	レトリーヴァー	・G・K・チェスタートン *G.K. Chesterton*	・89
・幕間・わが主人 *Love Me, Love My Man*	セッター	・コーリー・フォード *Corey Ford*	・119

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

・猟犬 *The Hound*	猟犬	・ウィリアム・フォークナー *William Faulkner*	・124
・茶色の犬 *The Chocolate Dog*	雑種	・マージェリー・アリンガム *Margery Allingham*	・143
・盲導犬 *Death before Breakfast*	ダックスフントシェパード	・Q・パトリック *Q. Patrick*	・152
・赤犬の冒険 *The Catch Dog*	牧羊犬	・ヴィニー・ウィリアムズ *Vinnie Williams*	・159
・吸血犬の謎 *Wolf Dog*	?	・ルイス・H・キルパトリック *Lewis H. Kilpatrick*	・176
・ブロードウェイの探偵犬 *The Bloodhounds of Broadway*	ブラッド・ハウンド	・デイモン・ラニアン *Damon Runyon*	・186
・しゃべらない犬 *The Dog That Wouldn't Talk*	ブルドッグ	・ローレンス・G・ブロックマン *Lawrence G. Blochman*	・201

本書を、今年の三月十一日に、十二歳
で世を去った老いぼれのPに捧げる

おまえの死をみとったやさしい三人の女たちに対して、男は私一人になってしまい、我が家の男性陣の旗色はますます悪くなってしまった。生前もおまえはたいして頼りになる味方ではなかったのだが。

おまえには、私にはどうしてもわからないミステリが二つあった。

標準体重を二キロも超過して、おまえはなぜダイエットもせずに平然としていたのか？

おまえの耳は、なぜ仲間たちとちがって生涯情けなく垂れたままだったのか。

死にかけていたおまえの名前を呼ぶと、おまえはつかの間、その耳を立て、起きあがろうとした。もう一度呼ぶと、もう一度耳を立て、起きあがろうとして、力つきた。

ヨークシャー・テリアだったおまえは。

一九八四・十・二十二　N・K

たちどまった犬

The Curious Incident of the Dog

ラルフ・N・ウェバー

Ralph Norman Weber

早朝のサンフランシスコ。たちこめる霧の中をにぶい黄色にライトを光らせ、サイレンを鳴り響かせながら、何台かのパトカーがマーケット通りを疾走してきた。コマンダー・ホテルの正面玄関で、車は一斉に止まり、警官たちがとび出し、路地を駆けぬけ、建物の両わきと裏手をかためた。

日焼けした、長身のブラウネル警部も車から降り、銀色の霧をぬって影のようにすばやく歩道を渡った。電光石火の早業で殺人事件を解決することで音にきこえた人物だ。玄関の両側に飾られた陶器の大瓶のそばまで来た警部は、盲導犬の索具(さくぐ)につまずいた。犬は主人を待っているらしい。警部が謝まると、もったいぶって詫びを受け入れるかのように目ばたきしてみせた。

小柄なブロンドの男が、デスクをまわって警部を出迎えた。「支配人のヒルトンです」

「警部のブラウネルです。おたくの警備員はどちらですか？」
「どこか、そのあたりにいると思います。この騒ぎにつきましては……」
「もちろん、すべて聞きました。ウインタートン夫人について、電話でいい忘れたことはありませんか？」
「ええっと、そうですねえ、金庫のことを申し上げなかったのではないかと思います。どうしてもとおっしゃるもんで、部屋に据えつけたのですが……ほんとに変わったお客様でした」
「おそらく、それが命取りになったんでしょう。行って調べてきます。十階でしたね？」
「さようで。ただ、誠に申しわけないんですが、このままお待ちいただくか、階段をご利用いただくことになります。ただいま、エレベーターが故障しておりますので」
「誰か閉じこめられているんですか？」
「はい。お客様のフリン様、クレイン様、ハイデン様のお三方が……」

盲導犬

目の不自由な人を犬に誘導させることは、一九〇〇年頃ドイツで考えられたが、本格的に盲導犬訓練が始まったのは第一次大戦中のフランスとドイツでのことである。

この戦争で失明した兵士のために、ドイツではM・クレーマーが、フランスではマルリック少佐とメニヤン中尉が、両国ほぼ同時に盲導犬訓練所を設立した。戦争が終わるとスイスとイギリスが、パリ近郊にあったフランスの盲導犬訓練所に研修員を派遣し、その後、多くの国々も訓練所をつくって、盲導犬の訓練を始めた。

ほとんどの犬種が、盲導犬になることができるが、大きさや素質が盲導犬に向いているシェパード、ラブラドル・レトリーヴァー、ゴールデン・レトリーヴァーなどが最適である。すぐ不機嫌になるドーベルマン、一般的に豊かな才能に欠けるダルメシアン、かなり気まぐれなボクサーなどは適していない。

盲導犬は愛情深く、利口で、大胆でなければならない。記憶力、方向感覚も優れた犬が望ましい。従順で、目の不自由な主人が危険にさらされたときは、命令に反しても主人の安全を守るよう訓練される。攻撃的な犬は適さない。

盲導犬として働ける年齢は、満二歳くらいから十二歳くらいまでだが、能力があれば老犬になっても大いに役に立つことが多い。

「階段を使いましょう。修理がすんだら、電話で知らせてくれますか？」
「かしこまりました」
ウインタートン夫人の部屋は、凶行の生々しさを物語っていた。こじ開けられた薄型の大きなトランクからは中身が放り出され、床には本や書類が散乱している。
被害者はうつぶせに倒れていた。銀のネットにくるまれた白髪は少しも乱れていない。白いリネンのガウンが血に染まっていた。
警部は背中の傷をたんねんに調べ、凶器は小型ナイフか匕首（あいくち）と判断した。
そこへライリー主任刑事が応援に駆けつけた。二人は、開けっぱなしの金庫に近づいた。
「こいつはたまげた」ライリーは大声をあげた。「現金（げんなま）がごっそり残ってる！」
「ああ。ホシの狙いはカネじゃない、夫人のエメラルドだったんだ。こいつがいわくつきの代物でね。豪華コレクションの最後の宝石だそうだ。売っていれば、夫人は女王のような暮らしができたろう」
凶器を探したが部屋には見当たらなかった。警部は時計に目をやった。
「手がかりになるものはここにはない。ほかを調べたほうがよさそうだ」
二人は、蜿々（えんえん）と一階までつづく階段を降りはじめた。二階の踊り場まで来たとき、エレベーターの動く音がした。最後の階段を駆けおりるあいだに、エレベーターのドアが開いた。
階段の下でヒルトンが、立ちふさがるようにして待っていた。
「こんなに早く降りていらっしゃるとは……いまお電話したんですが……」
ライリーがヒルトンを押しのけ、警部は、ロビーから外に向かう客の群れを追いかけた。
「警部さん」背後でヒルトンの声がした。「ご心配なく。その人たちは決して怪しい方たちでは……」
外にとび出したとたん、警部は、這いつくばるように入口にたどりついた玄関番のシンプソンに出く

わした。彼は陶器の大瓶に頭をぶつけ、怪我をしていた。
「革のコートの男にやられました」シンプソンは弱々しく訴えた。
「あいつだ、角を曲がって行く」ライリーが叫んだ。
「シンプソンを見てやってくれ。私は男を追う」
警部はネコのようにすばやく角を曲がったが、とたんに立ちどまった。さっきの盲導犬とはち合わせしたのだ。警部はとびのいて、飼い主を見おろした。盲人は歩道に倒れていた。黒いコートを着た、しわだらけの老人で、赤いゴムの先がついた盲人用の白い杖をしっかり握りしめている。ライリーの勢いのよい靴音が間近にきこえたので、警部は振り向いた。
「私が角を曲がったとき、この先でタクシーが走り出すのを見ませんでしたか？」ライリーはたずねた。
「やつは、それに乗って逃げたに違いありません」
「この人を頼む」警部は諦めたようにいった。「私はタクシーを調べてから本署に連絡する」
盲人は、怪我らしい怪我はしていなかった。「一体どこのバカ者だ？　こんな霧の中を走ってきおって、わしにぶつかるとは」彼はぶつぶついった。
警部は時計を見、半ブロック先のタクシーが止まっていたところまで全速力で走ると、かかった時間を書きとめた。そのままそこに佇み、盲人と犬が角まで歩いて行って立ちどまるのを見守った。
銀色の霧に包まれ、あたりは静まり返り、車の姿はまったくなかった。その時、白煙をあげてくすぶる残り火から一瞬あざやかな炎が燃えあがるように、突如警部の脳裡に事件解決のカギがひらめいた。
つかつかと角まで歩みより、ライリーの腕をポンと叩いた。
「あの盲人をつかまえろ！　ホテルまで連行するんだ。ホシはやつだ」
ヒルトンのオフィスで、警部は盲人のコートをはぎとった。コートは両面兼用だった。杖をぶら下げ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ていた、アームホールの下の輪を警部は指さした。
「こいつは角を曲がったあと、コートを裏返しに着て、通りに倒れているだけでよかったんだ。すぐあとから犬がやって来たというわけさ」いうなり、帽子と黒メガネもむしりとった。
「フリン様じゃありませんか！」ヒルトンが叫んだ。
「エメラルドはどこでしょう、警部？」
「ここだと思うよ」警部は、杖の先をはずした。「盲人はふつう、ゴムの先は使わない。金属や木製のものを選ぶ。音がするからね」
案の定、やわらかな布に包まれた宝石が見つかった。つづいて柄のところを回すと、巧みに仕込まれた匕首が出てきた。
「解決の決め手になるものがおありだったと思いますが、なんだったんです、それは？」ライリーがたずねた。
「ここに来たとき、盲導犬につまずいたろう。角を曲がったとき、また出くわした。ホテルの玄関から飼い主を追って行ったに違いない。犯人が誰であれ、この男にぶつかったあと車に乗って逃げるだけの時間はないとわかったとき、くさいと思った。だが、ほんとにピンときたのは、こいつが赤信号で横断せずに立ちどまったときだ」
「盲導犬は、赤信号で止まるように訓練されている」つかまった男が力なくいい返した。
「それが、おまえの思い違いだったんだよ。犬はみんな色盲だ。盲導犬は音で訓練される。車の音に耳をすませ、車が止まれば道を渡る。おまえが犬と一緒に角で立ちどまったとき、車は一台も通っていなかった。犬には信号が赤になったことなんかわからない。立ちどまって犬を止めたのは、目の見えるおまえのほうだったのさ！」

（新井百合子訳）

犬と頭は使いよう

Lester Uses His Head

アーサー・ポージス

Arthur Porges

忘れた手紙を取りに戻ってきたセルマ伯母さんに、彼女の愛犬レックスを蹴とばしているところを見られてしまった。それがことの始まり。

普段は目から鼻へ抜けるように悪知恵が働き、少々のことではおたおたしないレスター・ビッグも、不意をつかれて滅多にやらないへまを重ねてしまった。「やっ、すみません、セルマ伯母さん」とつい謝ってしまったのだ。「いつもはこんなこと絶対やらないんだけど――ぼく、レックスが大好きだから――でも、こいつ急に暴れだしてさ、咬みつこうとしたんだ。病気じゃないかな」言訳するうちに、いつもの頭の回転が戻ってきた。そうその調子、薄汚い婆さんの気をそらし、犬の健康に注意を向けさせるんだ。「ヴォーマー先生を呼びましょうか?」ひどく心配そうに訊いてみせる。

「ふん！」セルマは若い甥を睨みつけた。レックスのことなら何もかも承知している。コリーとエアデル・テリアとスパニエルと、それに血統のわからぬ駄犬の血が混じり合ったひどい雑種だということには目をつむっていたかもしれないが、愛犬の性質は知り抜いていたのだ。レックスは金網の向こうにいる自分より小さい犬には吠えるかもしれない。ちっちゃな仔猫には唸りながらにじり寄るかもしれない。だが、やけどをするのが怖くて、熱いチョコレートのカップにも近づけない意気地なしの犬なのだ。

だから伯母は一言も口をきかなかった。それが、しんそこ腹を立てていることを示す彼女のやりかただったので、レスターは自分がひどくまずい立場にあると悟った。三日間というもの、彼には口もきかずに過ごしたあげく、伯母は厳しい顔つきで彼を書斎に呼びつけると、怖しいことを言い出した。

「わたしは、おまえがレックスを嫌っていじめてるんじゃないかと長いあいだ疑っていた」とりつくしまもない口ぶりだった。「それに間違いないことがやっとわかった。いいかい、おまえはもう、わたし

コリー　全身しなやかな長毛におおわれた優雅な姿は、賢明そうで、人々をひきつける。祖先ははっきりしないが、ローマ時代の牧羊犬がスコットランドに渡って定着した犬であると考えられている。語源は、炭抗夫(Collier)から出たとか、スコットランド高地で十八世紀頃に顔と肢の黒い羊をColleyと呼び、それが犬の名に転化したとか、いろいろ説がある。現在コリーと呼んでいるのは、ラフ・コリーのことで、他に長いむく毛のベアデッド・コリーや毛が短いスムース・コリー、小型のボーダー・コリーがいる。

エアデルテリア　カワウソ猟専門のオッター・ハウンドをベースにオールドイングリッシュ・テリア、ブル・テリア、そして牧羊犬などをかけ合わせて作られたこの犬は、威厳と気品を備えているところから、〝テリアの王〟と呼ばれている。猟犬としては、ピューマに立ち向かうほどの勇気を持ち、家庭犬としては、陽気で利口でおとなしく、子供達の遊び相手や番犬としても役に立ち、嗅覚が鋭敏で持久力のあることから、警察犬や軍用犬としても用いられている。

スパニエル　スパニエルとはスペインの地犬の意味だが、それがイギリスに渡り、ウォーター・スパニエル（沼沢地の狩猟に適す）とランド・スパニエル（高地や平原などを得意とする）に分かれた。フランスをはじめヨーロッパ各地で最も普及しているのは、ランド・スパニエルから出たイングリッシュ・スプリンガー・スパニエルで、勇敢で疲れを知らぬ活動力を持ち、捜索を熱心によく続け、森でも茂みでも巧みに獲物を追い出し、狩りたてる。

の相続人ではなくなったよ」
レスターは息を呑み、汚れたしっくいのような顔色になった。
「とはいっても」伯母は続けた。「月に五千ドルは受け取れるがね」
ここでレスターはほっと吐息をつき、心の中で応酬した。毎月きまってそれだけ頂戴できるのなら、何百万もの遺産と較べても、そう見劣りするお涙金じゃありませんよ。「ただし」伯母は彼をキッと見据えて言い添えた。「それはレックスが生きてるあいだに限るからね」二度目にぎょっと息を呑んだとき、甥の喉仏の皮はあわや突っ張りそうになった。「あの子が死んだら、わたしの財産は残らずUGG－WOOFへいってしまうよ」
「な、なんだって？」いついかなる時にも冷静な態度をくずさないという評判もどこへやら、レスターは七面鳥みたいな声をだした。
「UGG－WOOF、つまり〝われらが旧友の福祉促進男女連盟〟（頭文字が犬の吠り声になっている）だよ。いろいろ研究したけど、これが動物愛護協会では一番いいようなんでね――おまえはそんなことには、まるで関心がないだろうがね。わたしが先に死んだ場合、おまえに任せておいたらレックスは放ったらかしにされるに決まっている。わたしが生きているあいだは、おまえは今までどおりの条件でこのままここで暮せばいい。ただし、二度とあの子をひどい目に会わせるようなことがあったら――！」
レスターの悪知恵がまたもや活発に働きだした。素数を追求する巨大なコンピューターさながらのスピードと正確さで、あらゆる角度から検討する。まず頭にひらめいたのは、犬がまったくの老いぼれになってしまったら、すぐさま替え玉を使うことだった。そうすれば、あの雑種犬を五十年でも生かしておくことができる。誰がいちいち気にしたり調べたりするだろう！
「おまえがなにか策略を用いるようなら」セルマ伯母は、まるで彼の考えにぴたりとチャンネルを合わ

せたかのように言った。「注意しておくけど、UGG－WOOFの代理人が、この件でおまえを監督することになるからね。おまえがわたしの遺言に違反しているのを見つければ、その男は自分の協会に多大な利益をもたらすことになるんだよ。そういうことだから気をつけるんだね、レスター。できるだけレックスの面倒をみておやり。そして、収入のあるあいだは、せいぜいそれを楽しむがいいよ」

伯母は、まるでそうした措置が必要になるのを予知していた予言者のようだった。わずか八カ月後に旅立ったのだ――相続権を剝奪されている、ろくでなしの甥にやっとおさらばして、いずれはレックスもやってくると固く信じている天国へと。

新しい生活が始まってみると、レスターにはいろいろと悩みが生じた。以前の月二百ドルの支給額をはるかに上まわる五千ドルを毎月もらえるのは、まことにすばらしかった。だが、いずれ必ずそれを失う時がやってくる。その辛さをより痛切に彼が思い知るように、セルマ伯母はわざとそれほどの高額にしたのだ。レックスはもうすぐ十四歳になる。甘い汁の吸える列車も、やっと乗り込んだ客が特別室にどっかり腰を落ち着けるまえに、終着駅に近づきつつあるということだ。

小さな不安はいくつもあった。犬の散歩という、あの面倒な仕事から解放されるために、トップクラスの業者を雇うふんぎりさえつかない。彼らはしょせん契約で雇われる身、うっかり革紐を離してレックスが車の前に飛び出したところで、彼らにはたいして影響があるわけではない。だが、そうなったら明らかにレスターは一巻の終わりだ。となると、売出し中の若手女優グロリア・グリーサムさえもデートの途中でおっぽりだして、いまいましいワン公と散歩としゃれこまねばならない。デートの相手はグロリアのほかにも、ジジ・ホルコムやドド・ドリーミーがひかえていたのだが。

それだけじゃない。レックスが咳をしたりくしゃみをしようものなら、あるいは、サーロインステーキに食欲を失おうものなら、たちまち、もうこれで一巻の終わりかとレスターの心配が始まるのだ。事

実、あまりにくよくよ心配し過ぎて、彼はヴィールスにやられてしまい、さまざまな注射を受ける羽目になった。どれもこれも高価な新薬だが、効き目のほどは蒸留水なみという注射を。

ところが医者の待合室で、去年の雑誌の中からわくわくするような凄い記事を見つけ出した。彼はそのページを破りながら、医者はおれのヴィールスのおかげで、この出版元を買い取れるほどしこたま儲けたんだから、もう一冊買うくらいなんでもないさ、とひねくれた言訳をしていた。彼はその破りとった紙切れを持って総合病院へ駈けつけ、昔のクラスメイトを捜した。その友人はいささか冷血漢ではあるが、すぐれた外科医になっている。

ドクター・クレイグは、病気に冒された体の器官は、驚異と謎に満ちた宝石だと感じる類いの男だった。完全に遮断された密室の中で挑戦できる宝石。ただ、病いに冒された人間、すなわち、患者の何ポンドもの健康な組織だけが、じつに邪魔っけなのだが。ほんとうに関心のある肝腎のところへ行き着くためには、探りながら試しながら、その人間を切らねばならない。腫瘍だとか、そうした喜びを与えるものが、どうして人間とは別個に見つけられないのだろう。

彼はレスターをさして懐しくもないといった様子で迎えた。彼らは似た者同士で、ともに、またとないチャンスをウの目タカの目で狙い、あさりつづけてきた大学での二人組だった。

レスターは手短かに要領よく、自分のとっぴな遺産相続について説明した。クレイグはひきつった意地の悪い微笑を浮かべ、友人の憤慨に共感しながらも、みごとな計画をたてたセルマ伯母の性格に好感さえ抱いた。

「ところが、たまたまこれを見つけたんだ」レスターは例の記事を見せた。「どんなもんだろう、トム？それとそっくり同じ手術をやれるかね？」

外科医はヒューと口笛を吹いた。その記事のさし絵には犬の頭がのっていた。生きていて、おそらく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com